タイ東北部中等教育機関における実践報告
——ウドンピッタヤヌクーン校での「1分間スピーチ」の取り組み——

吉川　景子

1. はじめに

2006年度の国際交流基金の調査によると、タイの初等・中等教育機関での日本語教育開講校は243校、学習者数は31679人と報告されている。筆者が2007年に行った調査によるとタイ東北部（北地域）の中等教育機関での日本語教育開講校は24校、学習者数は約3000人であった。

筆者は2005年4月から2008年4月まで国際交流基金の派遣でタイに赴任し、その間、2006年7月からタイ東北部ウドンターニー県にあるウドンピッタヤヌクーン校に派遣されていた。当校で日本語を学ぶ高校生は、授業中の練習問題やタスクなどはこなせるが、勉強した日本語を実際に使ったコミュニケーションに慣れていないと感じた。それは他の地域でも言えることだが、ウドンターニー県には日本人滞在者が極めて少なく、観光客もほとんど立ち寄らない、生徒たちの日本語使用場面は教室内に限られており、彼らが接する唯一の日本人が筆者であるといったことに起因すると考えられた。そのような環境の下、彼らのコミュニケーション能力を少しでも向上させるために行った取り組みのうち、「1分間スピーチ」を本稿で紹介する。

2. ウドンピッタヤヌクーン校日本語プログラム概要

当校は東北地方最大規模の中等教育機関で、前期と後期を合わせた6年間の中等教育が行われている。1998年より高校生に選択科目（週2コマ）として日本語が開講され、その後、専門科目（週5コマ）となり、現在に至る。教科書は『日本語　あきこと友だち』を使用し、3年間で6冊を終える。2007年度は以下の通りである（表1）。

表1　学生数と科目コマ数（2007年度）

M4（高校1年生）	48人	週5コマ	
M5（高校2年生）	45人	週5コマ	
M6（高校3年生）	34人	週5コマ	読解（週2コマ）

3. 「1分間スピーチ」の実践報告

3.1 取り組みに至る背景

授業中、学習者はペアやグループで練習問題やタスクに取り組んだ後、時間の許す限り、前に出て発表する形をとっている。学期を通して発表した回数は授業参加点として成績に反映される。

M4 の 1 学期はそのような発表スタイルに慣れておらず、なかなか前に出なかったり、発表中も恥ずかしがっていることが多いが、だんだん慣れてくると時間内に発表しなければならないので次々に前に出て発表する。しかし、発表者は 100%正解という自信をもってから丸暗記して発表するという傾向が見られる。また、発表を通して積極性は育成できるが、教室外での筆者とのコミュニケーションを見ると、短い文や会話の暗記だけでは勉強したことがあまり反映されていない。M6 になるとコミュニケーションがある程度とれるだけの能力があるはずだが、それを使うことに慣れていないと感じた。そこで、自分で伝えたい話を日本語で書き、自分の言葉で発表する「1 分間スピーチ」を採用することにした。内容を自分で考えて書くこと、ある程度まとまりがある文章なので、意味をきちんと理解し、頭の中で自分の言葉として捉えるプロセスが必要になり、コミュニケーション能力を向上させることができると考えられたからである。今回の活動では実際に話す力がついたのかどうかという観点からではなく、学習者が自らの実践をどう捉えたかという観点から「1 分間スピーチ」の意義を検討したい。

3.2 概要

(1) 目的：ある程度まとまった文章を書き、覚えて人に聞かせる「1 分間スピーチ」を通して、コミュニケーション能力の向上（自分の言葉で話すことに慣れさせる）を目指す。

(2) 時期：2007 年 5 月中旬から 2008 年 2 月

(3) 対象者：高校 3 年生（34 名）

(4) 内容：自由テーマで 1 人 2 回（1 学期に 1 回）、『日本語　あきこと友だち』第 30 課、練習 7 の送別会でのスピーチを 1 回（2 月）、M6 スピーチ発表会（2008 年 2 月 20 日）で日本人 6 名と日本語専攻の高校 1、2 年生の前でスピーチを行った。発表会でのスピーチは授業中発表したスピーチでも新しい内容でもよいこととした。最後にアンケート調査を行った。表 2 にスケジュールの流れを示す。

表 2　スケジュールの流れ

	活動内容
2007 年 1 学期（5～9 月）	自由スピーチ（1 人 1 回）
2 学期（10 月下旬～1 月） ↓ 2 月 ↓ 2 月 20 日	自由スピーチ（1 人 1 回） ↓ 『日本語　あきこと友だち』第 30 課練習 7 の送別会のスピーチ ↓ M6 スピーチ発表会 ↓ 事後アンケート（発表会当日）

(5) 評価：成績には参加点とスピーチ発表に対する評価が反映される。原稿を書き、チェックを受け、スピーチを完成して発表するというプロセスが達成できれば参加点を与えた。またスピーチに対してタイ人教師が「よくできた」「ふつう」「あまりよくない」の 3 段階評価を行っていた。

3.3 通常授業内のスピーチ発表

週 2 回、2 人ずつ、1 分程度のスピーチを授業の最初に発表した。好きなテーマについて自分で内容を考え、日本語で書いた原稿を筆者に提出し、筆者は特に構成に注意しながら原稿をチェックした。その後、修正したものを筆者の前で声に出して読み、発音をチェックした。発表者は原稿を各自覚えて担当日にクラスの前で発表した。発表後、スピーチの内容について、日本語またはタイ語でタイ人教師と筆者からクラスメートに質問した。質問はクラスメートが興味をもってスピーチを聞くよう促すためと、内容が理解できているかどうかの確認、発表者へのフィードバックを目的とした。

3.4 『日本語　あきこと友だち』第 30 課　練習 7 送別会のスピーチ

第 30 課　練習 7 の課題は送別会で日本語コースを選んだ理由、入った感想についてスピーチを行う。全員に同テーマでスピーチを考えさせ、授業中に発表を行った。このスピーチは教科書に例が 2 つ載っており、構成も書かれているので、学習者にとっては一から書かなければならないスピーチに比べて簡単なようであった。

3.5 M6 スピーチ発表会

日本語専攻の高校 1、2 年生の前でスピーチの発表を行った。今年は日本人 6 名（ウドンターニー県、コンケン県、バンコク）を招待した。筆者以外の日本人に会う機会が少ないため、このような機会にはできるだけ、知り合いの日本人に参加してもらうよう呼びかけている。この 6 名に審査員となってもらい、コンテスト形式にした。M5 は司会進行、会場準備、ビデオ撮影などの作業のほか、出し物として日本語劇を行った。M5 全員が何かしらの仕事を担当するようにした。日本人のグループ（3 人）には文化体験として合気道のデモンストレーションを行ってもらった。

3.6 スピーチ発表会でのテーマ

高校生活が終わる直前ということもあり、スピーチのテーマは学校生活に関するもの、日本語・日本に関するもの、将来・進路に関するものがほとんどであった。

1)　学校生活に関するテーマ（11）（(　) 内は人数を示す。）

1-1　ウドンピッタヤヌクーンの経験
1-2　高校 3 年間の生活
1-3　3 年間
1-4　ウドンピッタヤヌクーンの思い出
1-5　3 年間の思い出
1-6　私と学校
1-7　3 年間の時
1-8　私の思い出
1-9　3 年間の気持ち

2)　日本語・日本に関するテーマ（8）　（2-1　は 3.4 の課題と同じテーマである。）

2-1　日本語のコースを選んだ理由（5）
2-2　日本語への思い
2-3　日本へ行きたい
2-4　日本語の勉強

3)　将来・進路に関するテーマ（6）

3-1　将来
3-2　将来の夢
3-3　私の夢
3-4　したい仕事

4)　個人的な趣味・体験など（9）

4-1　私の友だち
4-2　一番大好きなアニメ
4-3　ホームステイ
4-4　大切な人
4-5　私の気持ち
4-6　私の好きな歌手
4-7　お寺
4-8　悲しかったこと

3.7 アンケート調査

3.7.1 目的と内容

スピーチをした感想と「1 分間スピーチ」活動に対する自己評価および学習者の捉え方を知ることを目的とする。34 名のうち 33 名から回答を得た。回答はタイ語での自由記述とした。アンケート項目は以下の通りである。

Q1. M6 になった時に、1 分間スピーチを授業で行うと聞いてどう思ったか。

Q2. 授業中、2 回のスピーチを行い、どう思ったか。

Q3. 高校 1、2 年生の前でスピーチを発表してどうだったか。

Q4. スピーチは日本語の勉強に役に立つと思うか。

3.7.2 アンケート結果

複数にまたがる回答もあったので、回答者数の合計は 33 名ではない。

Q1. M6 になった時に、1 分間スピーチを授業で行うと聞いてどう思ったか。

「がんばろう」「心配だったが、がんばろうと思った」といった前向きな意見（肯定的な意見）と「心配だった」という意見（否定的な意見）の 2 つにほぼ分類できた。否定的な意見が 6 割を占めた。最初は難しそうだし、大変そうだから、あまりやりたくないという生徒が多かったと考えられる。1 名の回答は直接この質問に対する回答とは言えなかったのでここでは無効とした。

肯定的な意見（11）

1. きちんと準備しなければならないと思った。(2)
2. いい勉強になると思って一生懸命準備しようと思った。(1)
3. できるだけがんばろうと思った。聞く練習もがんばろうと思った。(1)
4. 楽しみだった。(1)
5. 心配だったが、できるだけがんばろうと思った。(4)
6. 心配だったが、一生懸命準備しなければならないと思った。(1)
7. とても心配だったが、自分の意見や自分のことを日本語で発表できるよう、できるだけがんばろうと思った。(1)

否定的な意見（20）

1. 心配だった。(6)
2. 書けないし、話せないから、とても心配だった。(1)
3. できないと思ったからとても心配だった。(3)
4. 何についてスピーチをすればいいのかわからなかったので心配だった。(2)
5. 覚えられないかもしれないと思って心配だった。(1)
6. できるかどうかわからないと思った。(1)
7. 全然話せないから、その日が来なければいいのにと思った。(1)
8. とても心配でクラスを変わりたいと思った。(1)
9. びっくりした。(3)
10. はずかしいと思った。(1)

その他（1）

特に何も思わなかった。

Q2.　授業中、2回のスピーチを行い、どう思ったか。

結果を分類すると感想（緊張した、楽しかった、難しかった、ほっとした、できた、など）、自分の変化（緊張しなくなった、慣れた、前より速く話せるようになった、など）と練習方法としての視点（話す練習、書く練習など）に分けられた。質問が「どう思ったか」という聞き方だったので、率直に感想を書いている生徒が多かったが、中には「1 分間スピーチ」を通して自分の日本語能力や自信に言及したり、1つの練習方法として認める意見も見られた。

感想（30）（文章の後の（　　）内は筆者の補足である。）

1. とても緊張した。(7)
2. 難しかった。(5)（「あまり上手じゃないので難しかった」など）
3. 楽しかった。(3)
4. 終わったあとほっとした。(3)
5. 上手にできたと思う。(4)
（「やってみてできたからうれしかった。」「今までにこんなに長い文を書いたこともなかったし、できるとは思わなかった。」など）
6. 思ったより難しくなかった。(2)
7. あまり緊張しなかった。(3)
8. とても忙しくて心配だった。(1)（準備に時間がかかるという意味）
9. 授業中はあまり真剣に準備しなかったので全然よくなかった。(1)
10. うまくできたかな、失敗したところがあったかな、と思った。(1)

自分の変化（5）

1. だんだん緊張しなくなった、慣れた。(4)
（「だんだん緊張もしなくなり、自信もついた。」「授業中何回も練習して、慣れた」など）
2. とても疲れたけど、前より速く話せるようになった。(1)

練習方法としての視点（4）

1. スピーチは1つのいい練習方法だと思う。(1)
2. たくさん書いたり話したりする練習ができるので、もう1回やりたい。(1)
3. いい練習だと思う。話す練習をたくさんしたら慣れると思う。(1)
4. 友達の前で話すのはいい練習だと思う。(1)

Q3. 高校1，2年生の前でスピーチを発表してどうだったか。

「終わってほっとした」「とても緊張した」などの情意面の感想と「よくできたと思う」「自信がついた」などの自己評価にほぼ分類できた。また、後輩の前で行うスピーチ発表会自体について、後輩のモチベーションをあげる役割を指摘したり（「後輩へのいい手本になったと思う。」）、この発表会を日本語コースの勉強の集大成として捉えていたり（「スピーチをして勉強を終えたのでいい終わり方だと思う。」）する意見も見られた。M5 にはスピーチ発表会に別の形で参加するという意識を与えるために、日本語劇、司会進行、ポスター作成など全員に役割分担を行ったが、実際すすんでクラス一丸となって準備から当日まで役割をこなしてくれた。M6 に上がる前の動機づけとしてはいい機会だったと感じた。

情意面（27）

1. 終わってほっとした。(17)
2. よかった。(5)（「いい経験になった、やり終えて充実感があるという意味」）
3. とても緊張した。(6)
4. 日本語を勉強した時の気持ちを説明できてうれしい。(2)

自己評価（10）

1. よくできたと思う。(5)
2. 自信がついた。(3)（「何でもやればできるという自信がついた」など）
3. あまり上手にできなかった。(1)
4. あまりうまくできなくて残念だがいい経験になった。前よりもやる気が出て、将来も日本語を勉強したい。(1)

その他（5）

1. 一生懸命取り組まなければならないと思った。(2)（今後このような課題が与えられたら、という意味）
2. 後輩へのいい手本になったと思う。(2)

Q4. スピーチは日本語の勉強に役に立つと思うか。

回答者全員が役に立つと答えた。特に「積極性」「自信がつく」などの情意面と「話す練習になる」など、日本語能力のうち話す能力に言及するものが多かった。

情意面（21）

1. 前に出て発表する積極性が身につく。(9)
2. 前より自信がつく。(5)
3. 日本人と話すときに緊張しなくなる、自信がつく。(3)
4. 公的な場（大勢の聴衆の前）で発表する練習。(2)（緊張を強いられる状況に身をおく練習）
5. いい経験になる。(2)

日本語能力（17）

1. 話す練習になる。(4)
2. もっと正確に話せるようになる。(3)
3. 今まで勉強してきた経験を生かせる。(3)（「自分の知識がチェックできる」など）
4. 前より上手に話せるようになる。(2)
5. 発音がよくなる。(2)
6. 前より速く話せるようになる。(1)
7. スピーチの中に知らない言葉があって勉強になる。(1)
8. 書く練習になる。(1)

その他（3）

1. いろいろなことに役に立つ。(2)
2. 準備してのぞむ態度が身につく。(1)

3.8 考察

アンケートの結果から、最初は1分間スピーチを重荷に感じる生徒が多く、あまりやりたくないというのが本音であったと考えられるが、やってみた後では「上手にできたと思う」「思ったより難しくなかった」「自信がついた」「慣れた」など前向きな意見、変化が見られた。また「1 分

間スピーチ」活動に対しても、「積極性が身につく」「自信がつく」「発表する練習」「話す練習になる」「もっと正確に話せるようになる」「今まで勉強してきた経験を生かせる」など練習方法としても肯定的な意見が得られた。このことから、このクラスにおいては「1 分間スピーチ」の意義が認められたと言えよう。

3.9 問題点と今後の課題

1) 活動設計について

当校ではタイ人教師とティームティーチング(同じ時間に2人で授業に入る)を行っているが、全体の活動の流れ(授業での発表からスピーチ発表会まで)、発表者の準備から発表までの流れ(原稿を書いてから発表するまで)、評価方法などで2人の認識のずれがあったり、生徒が活動に関してきちんと理解していない場合などがあった。1 年の初めにきちんとすりあわせを行い、生徒への説明も徹底するよう注意する必要がある。

2) 評価について

今回の評価は発表者の準備点(原稿を書いて、筆者のチェックを受け、筆者の前で原稿を読む)、発表点（担当日に欠席したり、準備を忘れたりせずに、クラスの前で発表する参加点とスピーチに対する「よくできた、ふつう、あまり良くない」の3段階評価）で行った。評価はすべてタイ人教師によって行われた。話す能力を向上させるという目的はあるが、どちらかというと参加点（やりとげること）に焦点があてられ、スピーチの出来、不出来に関しては感覚的に評価されていた。もっと具体的な視点からの評価表を作り、点数化をすべきなのか、中等教育の段階では参加点と生徒の内面の成長を重視し、自分の中で変化があったか、「1 分間スピーチ」は効果があったと感じるか、自信がついたかどうか、など成績には関係ない自己評価に注目するかを1年の初めに話し合い、活動の目標を設定する必要がある。

3) タイ人教師の関わり方

今回は準備から発表までネイティブ教師である筆者がすべて行ったが、タイ人教師もその流れに加わるとなおよい。タイ人教師はスピーチ発表の当日に初めてスピーチを聞くことになり、その場で内容について日本語またはタイ語でクラスメートに確認しなければならない。先に原稿を見ておくと、発表する生徒の言いたい内容があらかじめわかり、準備できてよい。

また時間的な制約やタイ人教師への負担が大きくなるが、原稿チェックの段階でもタイ人教師が最初にチェックを行い、その後ネイティブ教師と話し合いながらもう一度チェックするという形が望ましい。原稿をチェックすることで、タイ人教師自身の日本語能力や添削指導などの教授能力の向上が見込まれるからである。またネイティブ教師がいない場合でも「1 分間スピーチ」活動が実施できるのが理想である。

4) 発表者の練習

原稿チェックをした後、本当はもう一度内容や構成を自分で練り上げて、自己修正をしたり、

覚えたものを本番で発表する前に筆者のところへ来て練習をしてもらいたかったが、生徒にも時間がなく、何回も通ってくるというよりは原稿チェックの1回のみ、その場で修正したものを読んでみる、というのが大半であった。最初にやり方を徹底させる必要があった。

5)　発表中のクラスメートの態度

スピーチを発表している時、クラスメートが聞いていないことがある。注意をむけさせるために、発表後に内容についての質問や要約をさせたりして対処した。3.8.4にも関連するが、発表者が余裕を持って原稿を提出するなら、スピーチの内容に関するワークシートを作成したり、新しい語彙・表現なども導入でき、より効果的に聴く練習ができるであろう。

4. 最後に

高校で日本語を専攻する生徒の動機はいわゆるポップ･カルチャー、日本文化への興味、日本へ行ってみたいから、など実に様々である。しかし、教室外では実際に使用する場面はほとんど皆無という環境下で勉強している。最初の動機の維持が生徒自身の中で困難な上、M6 になると、どの大学、どの学部を目指すのかを意識し始め、進学先によっては日本語が受験科目として必要なかったり、進学後、日本語の勉強を続けないと決める生徒も出てくる。よく M6 の生徒は2学期になると学校に来なくなるという話を聞くが（実際に当校の日本語専攻ではないクラスの中には2月になると30名以上のクラスで出席者が10名に満たないところも見られた)、そんな中、高校生活も終わりに近い2月20日に行われたスピーチ発表会では34名全員が1人も欠けることなく参加してくれたことを非常にうれしく思う。卒業後、日本語の勉強を続けない生徒もたくさんいるだろうが、日本語を勉強した3年間の中で身につけたものは日本語の知識だけでなく、それ以外のことも彼らの成長にプラスになると信じ、彼らの将来に期待したい。

参考文献

国際交流基金「国別日本語教育機関数・教師数・学習者数（2006年)」『国際交流基金』
<http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/img/2006-8.pdf> 2008年3月19日

国際交流基金（2004)「第30課　練習7」『日本語　あきこと友だち』第6冊、紀伊國屋書店（タイランド)、pp.78-79